

非政治的人間と政治

—トーマス・マンの場合—

六 浦 英 文
本 田 陽 太 郎
下 程 息

はじめに

第一次世界大戦前から同大戦後にかけて、ドイツの内発的・創造的「文化」(Kultur)は、技術主義、実利主義、民主主義を国家原理とする国々の「文明」(Zivilisation)と対峙することとなり、その問題の根深さはドイツ史上未曾有のものであった。本論ではこの「文化」と「文明」の確執を視座に、主として「ヴァイマル時代のトーマス・マン(Thomas Mann)」を取り上げる。そのためには、第一次大戦前から第二次大戦後に至る激動期を挟んだドイツの歴史と文化を総括的に捉え、諸々の歴史事象の地下水脈的繋がりと、それらがトーマス・マン(以下「マン」とする)の文学と人生形成に及ぼした影響とその過程を把握しなければならない。

第一次世界大戦のルーツは1871年にあった。数々の小国に分裂していたドイツは同年、プロイセンの「鉄血宰相」ビスマルク(Otto Eduard Leopold, Fürst von Bismarck-Schönhausen)の「現実政治」(Realpolitik)によって統一され、プロイセン王ヴィルヘルム一世(Wilhelm I.)が皇帝に即位し、「ドイツ帝国」が成立した。ドイツは、内政を改革し、欧米の政治技術と能率主義を取り入れ、「文化」の国を「文明」の国に加速度的に変身させることにより、近代化し国力を増強していったが、ドイツの大国化は、周辺諸国の脅威となり始めた。19世紀史上例を見ない力業であったドイツの発展と台頭は、『非政治的人間の考察』(*Betrachtungen eines Unpolitischen*. 1918年)¹⁾(以下『考察』とする)の著

1) Vgl. Thomas Mann: *Betrachtungen eines Unpolitischen*. Berlin 1918.

(I) Thomas Mann: *Große kommentierte Frankfurter Ausgabe* (=GKFA). *Werke-Briefe-Tagebücher*. Hg. v. Heinrich Detering, Eckhard Heftrich, Hermann Kurzke, Terence J. Reed, Thomas Sprecher, Hans R. Vaaget, Ruprecht Wimmer in Zusammenarbeit mit dem Thomas-Mann-Archiv der ETH Zürich. Frankfurt/M. 2002ff.

(II) Thomas Mann: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden* (=GW). Bd. XII, Frankfurt/M. 1974.

本論考においては、上記の(I)を底本とし、(II)を併記した。(I)が未完の場合、(II)のみを記載する。引用箇所は括弧内に巻数(本文の巻のほかに注の巻付属の場合、本文の巻数の次に注の巻数も併記する)と頁数を示す。訳文は新潮社版『トーマス・マン全集』(1977-1978年)のものを参照あるいは借用した。

者マンの見解に従えば、「音楽」に象徴され、精神の「内面性」を身上とする伝統的ドイツ「文化」の崩壊を代償としていた。つまりドイツの統一は、「脱ドイツ化」即ちドイツ文化の形骸化によって初めて実現されねばならなかったのである。こういうディレンマの上に成立していた皇帝治下の平和と政治的安定は、退屈感と倦怠感を蔓延させた。ちなみに表現主義の詩人ゲオルク・ハイム (Georg Heym) は第一次世界大戦勃発のおよそ4年前、1910年7月6日の日記に記している：「こういう平和は古い家具に塗り重ねられた艶出しのように、臭気を漂わせ、ねとねとぬるぬるしている。」²⁾ こういう沈滞状態は窒息感を招き、「世界の没落感と終末感」が時代の全般的な風潮となった時に芽生えてきたのは、この限界状況を新たな未来の告知とする非政治的・審美主義的な思想であり、闇夜に射光として幻視されたのが戦争であった。1871年のドイツ建国まで遡って俯瞰すれば、戦争は実質的にはすでに1914年以前に始っていたと言える。それは、1911年に書かれたハイムの詩「戦争」(*Der Krieg*) (1911年)の次のくだりを見れば明らかである：

Aufgestanden ist er, welcher lange schlief,	ながく眠っていた彼は立ち上がった
Aufgestanden unten aus Gewölben tief,	ふかい墓穴から立ち上がった
In der Dämmerung steht er, groß und unerkannt,	薄闇の中に彼は立っている。巨きな、未聞の姿をして
Und den Mond zerdrückt er in der schwarzen Hand.	その黒い手のひらで月をにぎりつぶす
...
Auf den Bergen hebt er schon zu tanzen an	山々のうへに、彼はすでにおどりはじめる
Und er schreit: Ihr Krieger alle, auf und an.	そして叫ぶ、お前たち戦士よ、皆立ち上がれ
Und es schallet, wenn das schwarze Haupt er schwenkt,	彼が黒い頭をふるたび、カラカラと鳴りひびく
Drum von tausend Schäden laute Kette hängt.	まわりにかけた数知れぬどくろの高鳴るくさがり
Einem Turm gleich tritt er aus die letzte Glut,	塔のごとく立ち、彼は最後の残り火を踏み消す
Wo der Tag flieht, sind die Ströme schon voll Blut,	日が落ちると、流れはもう血にみちあふれ
Zahllos sind die Leichen schon im Schilf gestreckt,	数知れぬ死体が葦の間によこたわり
Von des Todes starken Vögeln weiß bedeckt. ³⁾	強い死の鳥たちが白くおおう ⁴⁾
...

夭折した表現主義の詩人特有の現状否定のパトスと幻視力が目を射てやまない。彼が考えていた戦争の根底には現実政治に対する無縁感があり、このような非政治性は表現主義の全般的特性であった⁵⁾。従って、この非政治的な戦争は「詩人と思索家の国」ドイツの場合、「文明」による退廃から自国の「文化」を守るための最終的方策を意味していた。ドイツの文化人の多くは、これを世紀の転換期が直面せねばならない運命の試練と解し、旧い世界の崩壊を新しい世界到来の告知とする「黙示録」を大戦の咆哮から聴きだした。そ

2) *Georg Heym Lesebuch. Gedichte, Prosa, Träume, Tagebücher.* BsR 348. München 1987, S. 281.

3) Ebd., S. 80f.

4) 玉置保巳訳 同志社女子大学学術研究年報24 (3) 1973-11-30. 99-100頁 イタリアック部分筆者訂正。

5) Vgl. Walter Laquer: *WEIMAR. Die Kultur der Republik.* Ulstein Buch Nr. 3383. Frankfurt/M., Berlin, Wien 1977, S. 147.

れ故リルケ (Rainer Maria Rilke), ホーフマンスタール (Hugo von Hofmannsthal), ムー
 ジル (Robert Edler Musil), デーブリー (Alfred Döblin), デーメル (Richard Dehmel),
 ハウプトマン (Gerhart Johann Hauptmann), トーマス・マンとその盟友ヘルマン・ヘッ
 セ (Hermann Hesse) 等も, 大戦勃発当初は戦争を肯定し賛美していた⁶⁾。

しかし, ここで我が国におけるヘッセ研究に目を転ずるならば, ヘッセの人生と芸術を
 詳述した『ヘルマン・ヘッセ研究 (第一次大戦終了まで)』(1980年)のなかで著者の井手
 貢夫は当時のヘッセについてこう述べている。

[この] 大戦の苦悩と精神分析療法とが詩人に深い覚醒の機会を与えはしたが, その
 方向はすでに戦前から決っていた, ということができる。そのことは, 第一次大戦に,
 詩人がすこしも感激しなかったということ, 冷静に, しかもある無頓着さをもって,
 戦争の無意味さを発表したことから見ることができよう⁷⁾。

高橋健二の『ヘッセ研究』⁸⁾も, ヘッセが大戦当初戦争を肯定していた問題には触れて
 おらず, ヘッセは終始反戦平和の詩人として自我を貫徹したというのが, 当時の通説となっ
 ていた。しかし事実はそれと異なることを, 2001年から2007年に亘って刊行されたズール
 カンプ (Suhrkamp) 版ヘッセ全集⁹⁾は明らかにした。ヘッセは1914年の詩『子供たちに』
 (*Den Kindern*) において, 戦争をドイツの自己犠牲による創造の端緒であると見做してい
 た。その部分を見てみよう:

...
Gedenkt des Bluts, der Schlachten, der Zerstörung,	血を, 戦いを, 破壊を心にとどめよ
Auf denen eure Zukunft ruht,	その上にこそおまえたちの未来はあるのだから
Und wie auf Tod und Opfer vieler	そして忘れるな, どんな小さな幸福も
Das kleinste Glück sich baut ¹⁰⁾ .	多くの人々の死と犠牲の上に築かれることを ¹¹⁾
...

「時代が車を走らせる。だが誰も運転できない」¹²⁾とケストナー (Erich Kästner) は詠っ
 ているが, 当時の混乱した政情は誰しも収拾できなくなっていた。人は時代の雰囲気支配され,
 反戦派は好戦派に, 好戦派は反戦派に鞍替えする。この混沌のなかでいち早く反

6) Vgl. Manfred Görtemaker: *Thomas Mann und die Politik*. Frankfurt/M. 2005, S. 26f.

7) 井手貢夫『ヘルマン・ヘッセ研究 (第一次大戦終了まで)』第2版 1980年 449頁。

8) 高橋健二『ヘッセ全集 別巻』新潮社 1972年。

9) Hermann Hesse: *Sämtliche Werke in 20 Bänden* (=SW). Hg. v. Volker Michels. Frankfurt/M. 2001-2007.

10) Ebd., Bd. 10, S. 226.

11) 『ヘルマン・ヘッセ全集』第16巻 鳥途健一訳 日本ヘルマン・ヘッセ 友の会・研究会編 臨川書店 2007年。

12) Vgl. *Die Zeit fährt Auto*. In: Erich Kästner: *Gedichte*. Hg. v. Harald Hartung in Zusammenarbeit mit Nicola Brinkmann. Deutscher Taschenbuch Verlag. München 2004, S. 40.

戦平和の立場を表明したのは、ヘッセであった。大戦勃発前から中立国スイスにいた彼は、ドイツ人捕虜慰問のための奉仕活動に参加すると共に、戦争の現実を知り従前の戦争観念を根本的に変える。以来この国に定住し、1918年以降は、ロマン・ロラン（Romain Rolland）を盟友として反戦平和のために言葉で闘った彼は、祖国ドイツでは売国奴の烙印を押され、孤立無援のアウトサイダーとならねばならなかった。しかし彼の人生、特に世紀の転換期における作家としての歩みは、以下取り上げるマンの場合とはおよそ対照的である。ここで再度井手の所論を引用すると：

トーマス・マンの当時の考え方には非常にドイツ的な、当時の帝国主義的思想がよく代表されている。それはすでにナチスの思想につながるものであり、また第二次大戦におけるわが国の代表者の言動を思いおこさせるものがある。戦争というものが、いかに愛国心に訴え、それをどれほど歪めるものであるか。それをトーマス・マンは後に強く反省しなければならなかったのだ¹³⁾。

上掲の井手の所論に対する反証として1947年に公表された丸山真男の『日本ファシズムの思想と運動』におけるファシズム解析を挙げたい。丸山によれば、家族主義、家族国家という考え方と、それから生ずる忠孝一致の思想は、「夙に」明治以後の絶対主義国家の公権的イデオロギーであって、「国体」を強調するファシズム運動において、このイデオロギーが一貫して強く前面にあらわれていることは、なんといっても独伊等のファシズムに見られない特質である¹⁴⁾。ここで丸山はこう腑分けする：「日本のファシズムはドイツやイタリーのようなファシズム『革命』をもっておりません。……大衆組織をもったファシズム運動が外から国家組織を占拠するというような形はついに一度も見られなかったこと、——むしろ軍部、官僚、政党等の既存の政治力が国家機構の内部から漸次ファシズム体制を成熟させて行ったということ、これが日本のファシズムの発展過程においてもっとも大きな特色であります」¹⁵⁾。また竹山道雄も日本のファシズムとナチズムとの根本的な質的相違について別の角度から断定している：「すくなくともナチスのしたようなことはまったくなかった。あのような冷酷な計算による悪魔的所業はなかった」¹⁶⁾。ここに確認されるのは、ドイツと日本のファシズムの根本的な質的相違である。井手のヘッセ研究はこれら双方の著作発表の20年以上のちに刊行されたものであることを、指摘しておきたい。井手のこのような見方では当時の紆余曲折したマンの歩みも、その「どこかにメランコリックで屈折した心理のかげり」¹⁷⁾を帯びた表現の多声的な広がりや深みも具体的に把握できない。

13) 井手貢夫 前掲書 461頁。

14) 丸山真男『現代政治の思想と行動』未来社 1956-57年 42頁参照 括弧内同書からの引用。

15) 前掲書 70-71頁。

16) 竹山道雄『昭和の精神史』新潮文庫 1956年 109頁。

17) 脇圭平『知識人と政治——ドイツ・1914～1933——』岩波新書 848 1973年 6頁。

2

革命、皇帝の退位、敗戦、帝国の瓦解とともに、ドイツが第一次世界大戦に仮託していた飛翔の夢は打ち砕かれた。以来、ビスマルクによる「脱ドイツ化」を発端とするドイツの「政治化」は決定的となる。ドイツにおいてそれまで社会生活上第一義とされてきたのは、魂と精神の陶冶であった。従ってドイツの政治とは、市民個人々の行動様式である「エートス」(Ethos)の次元の問題であり、イギリス、フランス、ひいてはアメリカの政治の観念とは水と油であった。デモクラシーによる議会政治は精神の低い次元の技術であって、帝政や権力政治はこの「エートス」を保護してくれる防波堤となっていた。つまり、ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe)以来ドイツという国家の指導者層を形成していた教養市民の政治感覚は、本質的に「非政治的」なものであった。しかし教養市民層は第一次大戦勃発前以来、時代を制覇しはじめた「政治主義」、即ちマンの持論に従うならば、兄ハインリヒ・マン(Heinrich Mann)(以下「ハインリヒ」とする)を旗頭とする新時代の「文士」(Literat)達が代弁していた「現代のジャコバニズム」という大波の前では、非力であった。ドイツ市民文化伝来の非政治的思考は、20世紀という新時代に入ると共に衰退の一途を辿り始め、非政治的市民文化の伝統の崩壊は、第一次世界大戦での敗北を契機に決定的となった。市民の家系のデカダンスによる没落を自伝的に描いた処女長篇『ブッデンプロック家の人々』(Buddenbrooks. 1901年)により世界的作家の地位を確立したマンも、自己の人生と創作の基盤を失わねばならなかった。それ故市民作家の末裔である自己の文学に備わる伝来の正統性を立証するために『魔の山』(Der Zauberberg. 1924年)の執筆を中断し、ハインリヒに対する論争の書『非政治的人間の考察』を1918年、敗戦と革命の巷で世に問うた¹⁸⁾。この膨大なエッセイにおけるマンの論旨展開のプロセスは屈折しており、その語調の烈しさはこの作家の全著作中類を見ない。

第一次大戦は、フランス側からすれば、1789年のブルジョワ革命によって確立された国際正義・理性・文明・進歩の精神を蹂躪する非人道的暴挙であり、ドイツ側からすれば、ヨーロッパの連合国に包囲された祖国の死活を制する不可避な運命の告知であった。マンは、1914年大戦勃発当時の正統派ドイツ文化人と同様、ドイツの勝利を願い、戦争そのものに反対してはいなかった。彼は『戦時随想』(Gedanken im Krieg. 1914年)において、彼特有の反文明的・非政治的な見解として、愛国主義的・審美主義的な戦争観を表明し、戦争による「浄化作用」を期待していた。彼は、皇帝治下の権力政治のいかがわしさと、それとは百八十度異なる新時代の到来に気づいてはいたが、文化と秩序を維持してきた従来のドイツと、その保護下の非政治的ドイツ市民文化の伝統に対する惜春の想いを捨てきれなかった。それ故マンは、「反戦平和」と「西欧デモクラシー」をスローガンとする「文明の文士」(Zivilisationsliterat)達の指導的文学者・文芸評論家ハインリヒに対する論

18) 1918年10月6日、マンは敗戦を知り、『考察』の出版を取り止めるようフィッシャー書店に電報を打ったが、本書は活字化に回っているという返事がきたとのことである。Vgl. Görtenmaker: a. a. O., S. 42.

争即ち自己告白の書である『非政治的人間の考察』によって、自己の文学と人生の精神的地盤を根底まで掘り下げ、問い質さねばならなかった。

『考察』においてもマンは、自己の創作の定石である、過去と現在の歴史事象の質的同一性の抽出と確認という、通時的観察方法に依拠し、大戦を、ルター (Martin Luther) がローマ・カトリックに対して行った内面的・形而上的なドイツ精神の異議申し立ての再生と特徴づけている。中立国ベルギー侵犯も、ヨーロッパ文明諸国に対する文化の国ドイツの自衛行為と看做すマンにとっては、反戦平和主義と西欧デモクラシーの指導者ハインリヒも、18世紀の「ジャコバン主義者」(GKFA 13.1, 416; GW XII-382) の血を引くアジビラ作家にすぎなかった。しかし、その政治主義が、ルターを元祖とする伝統的ドイツ文化のパラダイムシフトを導くという、有史以来の脅威を傍観黙視しているわけにはいかない、というのが当時のマンの心情であった。ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer), ニーチェ (Friedrich Nietzsche), ヴァーグナー (Richard Wagner) という「三連星」(GKFA 13.1, 79; GW XII-72) によって代表される、19世紀のペシミズムの嫡子であるマンにとって、西欧デモクラシーはドイツの非政治的市民文化の否定を意味していた。ドイツの使命は内面的・個性的なドイツ文化を超時代的・普遍的次元にまで高めることであって、それを可能にするのは、西欧デモクラシーではなく、ドイツの「自由」であり、ドイツの作家は、ゲーテ、シラー (Friedrich Schiller), トルストイ (Lev Nikolaevich Tolstoi), ツルゲーネフ (Ivan Sergeevich Turgenev), ストリンドベリー (August Strindberg) 等、世紀の巨星と「三連星」を師匠と仰ぎ、アンビヴァレンツそのものである生を具体的・多元的に描き出すために、この自由を実践せねばならない、とマンは確信し、「審美主義者」(Ästhet) として次のように兄を糾弾する：ジャコバン主義者たちがひとたび政権を獲得した時に始まるのは、同士間の権力闘争であり、そこから自由は生まれず、独裁者を倒した政権はまた独裁を始め、恐怖政治は止まるところを知らない。これがジャコバン主義者ハインリヒの言うデモクラシーによる政治である。自分と同様、没落する非政治的市民が呈する末期現象であるデカダンスの芸術家ハインリヒは、ジャコバン主義の正体を直視せずに、ヨーロッパ文明諸国の政治主義を盲目的に賛美する「放埒な審美主義」(GKFA 13.1, 615; GW XII-566) の徒である、と。この観点からマンは、因襲的権威を全面否定するために象徴的な意味での「父親殺し」を敢行する表現主義を、ハインリヒ批判の射程内で酷評している (GKFA 13.1, 576 以下; GW XII-530 以下)。ちなみに表現主義の作家ヴェルフエル (Franz Werfel) は1922年のノヴェレ『殺された者に罪がある』(*Nicht der Mörder, der Ermordete ist schuldig.*) のなかで、主人公である「私」の出会った老人の口を借りて、主人公の父親、主人公が入隊していた軍隊組織、当時の社会体制、即ち「権威」の総称となっている「父親」をこう弾劾する：

父権 (patria potestas) なる権威はそれ自身に於いて不自然であり、破壊的原則である。それがあらゆる暗殺・戦争・凶行・犯罪・憎悪癖・断罪の起源なること恰も「息子たること」があらゆる抑圧的奴隷根性の起源なるが如きものであって、息子の精神

こそ、すべての史的國家建設の礎石中に塗り籠められた汚らわしい腐肉である……

我々は然し生きている、廓清するために！¹⁹⁾

ではこの「廓清」、すなわち肅清を如何に行えば良いのか、という主人公の問いに対してこの老人は叫ぶ：「血と恐怖とに依ってじゃ！」²⁰⁾ この老人に洗脳された主人公は狂気の発作に取り憑かれ、夢のなかで父親を殺害し、勝利に酔い痴れる。それは、父親に対する愛憎併存感情の極限的・幻覚的発現であり、マンは表現主義のこのようなラディカリズムとエクスタシー、すなわちそのテロリズムを嫌悪しきっていた²¹⁾。彼の文学の原点となっている『ブッデンブローク家の人々』により瞭然であるが、マンほど自己の家父長的世界に敬虔だった作家はいない。これは、『魔の山』、さらには四部作『ヨーゼフとその兄弟たち』(Joseph und seine Brüder. 1933-1943年) 冒頭部での主人公の先祖と家系に関する叙述からも窺える。

『非政治的人間の考察』において吐露されている、近親憎悪感情は止まるところを知らない。成程、トーマスとハインリヒ兄弟間の作風と手法の相違は著しく、それは一見すれば、独仏文化の相違にも例えられよう。しかし、マン兄弟の文学は究極的には実質を同じくしていた。と言うのも、ハインリヒは、『ブッデンブローク家の人々』の著者と同様、世紀末のデカダンスを作品のテーマとしており、マンもまた、この長編によって今まで祖国に根を下ろしていなかった本格的な西欧流の小説作法を導入し、ドイツ文学の西欧化、すなわち「脱ドイツ化」に寄与したからである。ハインリヒと共にこのような同質同根の体験をしてきたが故に、自己自身を知悉していたマンの審美主義批判は、従って同時に、「審美主義者」である自己自身に対する批判となった。

『考察』の雰囲気は「死に対する共感」であり、マンの「^{まこと}真の情」であったが、政治の動静は今や時代にとって決定的となり、『考察』は退却戦であることをマンは客観的事実として認めざるを得なかった。物事を多面的に観察できる「イロニーの芸術家」であるマンは、青春時代にニーチェから学んだ「距離のパトス」²²⁾で物事と人間存在を根底から見極めることのできる、アンビヴァレンツの芸術家であった。それ故『考察』では激白しながらも、「理知の営み」をもって「考察」することを忘れなかった。様々な危機により

19) Franz Werfel: *Nicht der Mörder, der Ermordete ist schuldig*. München 1922, S. 101. (成瀬無極訳 世界文学社 昭和21年)

20) Ebd., S. 102. 訳文前掲書 71頁。

21) Vgl. Thomas Mann: *Tagebücher. 1918-1921*. Hg. v. Peter de Mendelssohn. Frankfurt/M. 1974, S. 223. 以下『日記』からの引用に関しては以下本文中にその日付を略号「Tb.」の後に記す。

22) Friedrich Nietzsche: *Jenseits von Gut und Böse*. In: Friedrich Nietzsche. *Werke in drei Bänden*. Bd. 2. Hg. v. Karl Schlechta. München 1955, S. 727. マンのごく初期の短篇 *Der Wille zum Glück* (1896年) のなかにこの *das ›Pathos der Distanz‹* (GKFA 2.1, S. 51; GW VIII-44) というニーチェのテルミノロジーが引用されている。

自己自身に突き入り自己批判を敢為する勇気を獲得したが故に、マンは、生と精神両極を中間で仲介する「イロニー」のなかに政治と芸術のラディカリズムを制御する機能を見極め、政治と芸術の広い意味での類似性を指摘することができた。

政治の状況は芸術の状況と似ている、と私は断言した。双方とも生と精神を中間で仲介する位置を占めている、と私は思っていた。故に私は、ここからイロニーへの性向を引き出したのであるが、この性向は自分の芸術に対してはともかく認めえてもらえるだろう。しかし「イロニッシュな政治」とはどういうものだろう。……政治とは必然的に仲介とポジティブな成果を目指す意志となる。政治とは、聡明さ、柔軟さ、礼儀正しさ、外交の才能である。それ故政治は、……常にラディカリズムの反対物であり続けるために、決して無力であってはならないのである。(GKFA 13.1. 628; GW XII-578)

マンの著作は、すべて「心情の次元」と「理知の次元」とが関連し合いながら構築された有機的全体となっている。『考察』においては「心情の次元」が強いが、本エッセイのキーワードはイロニーであり、それはマンにとって人生と文学を救済する契機であった。また、それは非政治的人間の政治原則であり、危機を糧にして以後数々の大作を完成できた素因であると同時に、この混沌の時代を生き抜くための処世術でもあった。

『考察』の成立のために犬馬の労を惜しまなかったゲルマニスト、エルンスト・ベルトラム (Ernst Bertram) は言うまでもなく、ゲルマニスト、エドヴァルト・ヘラルト (Edward Herald) は『考察』をヴェルダン (Verdun) の英雄ヒンデブルク (Paul von Hindenburg) の功績を文学的に表現したものと見なし²³⁾、ドイツ独自の道の開拓を主張する愛国者たちにとって、『考察』は「反共和国派の家庭の聖書」となった²⁴⁾。のちの「保守革命」(Konservative Revolution)の主唱者アルトゥル・メラール・ファン・デン・ブルック (Arthur Moeller van den Bruck) もマンに興味を示していたが、極左はマンを支持せず、結果的に『非政治的人間の考察』は政治的に作用し、当時の政治に利用され、仲介による両極の相互宥和を使命とするマンの「イロニー」は、それほど理解されなかった。

ドイツにおける革命、皇帝の退位、敗戦等、当時のマンの日記を見ると、目まぐるしい時の推移に対するマンの想いは、帝政時代への郷愁、ヒンデブルク支持、欧米流議会主義及び国際連盟に対する反感、秩序再興への渴望、ファン・デン・ブルック一派に対する興味、『西欧の没落』(Der Untergang des Abendlandes. 1918-1922年)の著者シュペングラー (Oswald Spengler) に対する心酔等、その内容は全般に『考察』の言辞の換言と再確認の域に留まっている。しかし、当時のマンの新しい肉声となったのは、敗戦後台頭してきた「共産主義」に対する想いである。マンは「千福年説」という黙示録を基調音とする「共

23) Vgl. Sebastian Hansen: *Betrachtungen eines Politischen. Thomas Mann und die deutsche Politik 1914-1933*. Düsseldorf 2013, S. 69f.

24) Ebd., S. 186.

産主義」に共感しながらも、同時にそれによって発生する無秩序を危惧していた。アナーキーに対しては左右を問わず強権発動による秩序回復をも望み、カップの一揆に反対した。心情の動揺がこれほど激しかった時期はなかったことが、マンの日記から窺われるのであるが、土壇場に追い込まれたが故に、彼は「イロニー」を死守しなければならなかった。またそのいかがわしさに気づき、ファン・デン・ブルック一派に対しても距離を置き深入りはしなかった。作家は、一段高い視座からすべてを見るだけの精神の余裕を持たねばならない。従って創作は、人間性のもっとも深刻であると同時に自由な「遊び」(Spiel)であり、さなくば、両極間の仲介による双方のイロニシユな宥和という難行は不可能である。マンは『考察』のなかで、このような創作の秘訣をシラーの次の言葉を引用しながら力説している：「人間が完全に人間となりうるのは、遊んでいるときだけである」(GKFA 13.1, 344; GW XII-315)。それ故マンが日夜心に懸けていたのは、ゲーテを範とする時空を超越した叙事詩の創作と『魔の山』の執筆再開であった。

3

ドイツは敗戦の結果制定された「ヴァイマル憲法」を遵守し、西欧デモクラシーを軌道に乗せようにも、その支えとなるべき社会的・政治的基盤が極めて脆弱であった。ヴェルサイユ講和条約により課せられた巨額の賠償によって国民の経済生活は窮乏し、左右の政党が抗争を繰り返す、議会主義は不安定そのものであったが、シュトレゼマン (Gustav Stresemann) 時代に入るとドイツは経済を回復し、国際連盟に加入し威信を回復することができた。しかし1929年、ドイツ経済は世界恐慌のため崩壊し、また以前の状態に逆戻りする。理性的共和派や中間派は左右両極から挟撃され、同時に、左右両極の対立は激化し、悪循環が繰り返される。「……大衆の多くはつねに瞬間的な力の重心がある方にすぐ転がっていく……」²⁵⁾。当時の混迷ぶりは敗戦後のそれとの比ではなく、インテリ層の大部分は形勢を座視した。マンも時代の空気に飲み込まれ、その政治判断は時折々の政治状況と周囲の動きに左右されたが、マン文学のキーワードである「イロニー」、即ち「中庸のパトス (Pathos der Mitte)」(GKAF 15.1, 934; GW IX-171) は、最後のところでは死守されていた。

この窮境において当時きわめて強いインパクトとなったのは、ファン・デン・ブルックたちによって提唱された「保守革命」の理念である。それは、この混迷する現状の盲点を鋭く突き、閉塞状態を打破する新しい道を開拓しようとする進歩と同時に、厳格な秩序の再建を目指す復古のラディカリズムという、両極双面的理念であり、ナチズムの台頭を推進する役割を果たすものであった。ナチスは、不安な政情と低迷する経済に苦しんでいた国民の不平と不安を巧妙に利用し、勢力拡大をはかった。非政治的なドイツ市民文化の伝統に終止符を打ち、民族主義を国是とするナチズムは、新たに台頭してきた大衆の時代の

25) Stefan Zweig: *Die Welt von Gestern. Erinnerungen eines Europäers*. Frankfurt/M. 1978, S. 366. シュテファン・ツヴァイク『昨日の世界』下巻 原田義人訳 慶友社 昭和27年 237頁 (『ツヴァイク全集』第20巻『昨日の世界』II みすず書房 596頁)。

イデオロギーであり、その内実は市民社会の局外者ナチ党员によって徹頭徹尾組織化された政治運動であった。この下からの革命は、頹廢と混迷の渦中にあったドイツに対する「浄化の嵐」(Tb.2.7.1934)として作用した。当時のマンの見解によれば、この「前代未聞の革命」(Tb 27.3.1933)であるナチズムの為政者たちが民衆を緊縛するため、反西欧ドイツ民族の団結という陶醉の園に囲った彼らに投げ与えたのは、「同性愛という精神的な餌」(Homosexualität als moralischer Köder) (Tb. 12.7.1934)であった。従ってナチズムとは、極度の知的・道徳的破産を露呈した、精神の倒錯現象であった。ナチズムを批判するマンは、青春の自画像である『トーニオ・クレーゲル』(Tonio Kröger. 1903年)で「いかさま師 (Abenteurer)」(GKFA 2.1, 269; GW VIII-294)と烙印した芸術家である自己自身にまず批判の刃を突きつけなければならなかった。マンの場合、「時代批判は根底においては自己批判となる」²⁶⁾という戦前からの信条は終始一貫しており、彼は、ナチズムを芸術家である自己自身に、ひいては人間性そのものに潜在している「悪」としてその深層から把握する。さればこそ1939年、自己凝視と自己弾劾のエッセイ『兄弟ヒトラー』(Bruder Hitler)を書くことができた。

1933年、議会はナチスによって合法的に乗取られ、左も右もナチスに敗北する。「ワイマル共和国は敗戦のなかで生まれ、混乱のなかで生き、そして悲な死を遂げた」²⁷⁾のである。もっとも必要であったはずの理性的な共和派は無力であった。ナチズムは一過的なものであって、このような野蛮で下等な政治は長続きしないと考え、身を引いて形勢を傍観していたため、第二次世界大戦終結後、不明を恥じる教養市民の数多くは、有形無形に強要されて自己批判を行った。この問題が「過去の克服と清算」というかたちで第二次世界大戦終結以来現在も論議を呼んでいることは周知の通りである。ちなみに、メルケル首相は2015年5月2日、第二次世界大戦終結70周年を前にしたインタビューでドイツ国民に対し、歴史に終止符を打とうと望むことがないよう警告すると共に、国民がさらに歴史と徹底的に取り組み、ドイツ人の価値観も本当に生かされるよう訴えた²⁸⁾。このメルケル首相の訴えについて2015年5月4日の朝日新聞にもその概要が紹介されているが、それは以下の文言に集約される。「歴史に終止符はない。我々ドイツ人は特に、ナチス時代に行われたことを知り、注意深く敏感に対応する責任がある。」

戦争によってじかに突きつけられ、戦前から予感されていた、旧い世界の崩壊と新しい世界の生成という問題をヴァイマル共和国はより尖鋭なかたちで提起した。先に触れたヴェルフェルの小説『殺された者に罪がある』の主人公の独白によれば、耳目に触れるのは「雷鳴！世界の没落！」²⁹⁾であり、「何は兎もあれ破局は終に和解の祝祭に変はる……」³⁰⁾よっ

26) Thomas Mann: *Geist und Kunst*. In: Paul Scherer/Hans Wysling: *Thomas Mann-Studien*. Bd. 1. Bern/München 1967, S. 219.

27) Peter Gay: *Weimar Culture. The Outsider as Insider*. New York, Hagerstown, San Francisco, London 1968, S. 2. ピーター・ゲイ『ワイマル共和国』亀嶋庸一訳 1987年 2頁。

28) 2015年5月2日ドイツ政府ホームページ参照。インタビュー：Veronica Settele, Historikerin an der Freien Universität Berlin.

て作者はエピローグで語る：「いやしくもこの世に新らしい血，新らしい生命，生々しい現実を齎らさないものは，すべて無意味だ。問題は係って新らしい現実にある」³¹⁾，と。この作品は敗戦後1920年に発表されたという事実を見れば，大戦勃発以前及び大戦期間中と同じく，旧い世界の崩壊を新しい世界到来の契機とする「黙示録」の問題がヴァイマル時代にも主題化されていたことが読み取れる。従って，戦争は実質的にはヴァイマル時代にも継続しており「ワイマルの理想は，古くて新しいものであった。」³²⁾ マンは1919年1月17日，『フォルヴェルツ誌』(Vorwärts)の編集部宛に次のような見解を披露している：

ドイツの革命を崩壊と解体としてしか見ないのは間違っているに違いない。ドイツの敗北には何かきわめて逆説的なところがある。月並みな敗北ではない。敗北に終わった戦争は並みの戦争ではなかったが，この敗北にはこの戦争とほぼ同じようなところがある。私がすべてに惑わされていないとするならば，比べようもないこの敗戦を与えられている国民は，単に挫折した国民ではない。この国民は今日でも1914年当時のように諸々の未来の力にささえられている，と実感している³³⁾。

実質的には第一次大戦が続いており，極限状況に直面していたヴァイマル時代の芸術家は，この混沌状況から抜け出すために思想上，言語上，技法上の可能性を模索し，互いに競い合いながら活動を敢行していた。「ヴァイマル文化の時代は，最高の時代であったと同時に最悪の時代であった。最も重苦しいと同時に最も刺激的な時代であった。」³⁴⁾ 表現主義をはじめ，未来派，ダダイズム，政治的行動主義等，いわゆるアヴァンギャルディズムの流派は「新たなる出発」と「新しい人間の創造」を焦眉の使命としていたが，これらラディカリストたちが共有していた幻想的・妄想的ユートピアは，短命に終わった場合が多い。存命できたのは，当時の文壇のどの流派にも属さず，変動する時代の体験を糧とし，創作でもって時代と対決した作家達であった。その適例はヘッセとマンである。ヘッセの『デミアーン』(Demian. 1919年)とマンの『魔の山』(1924年)は共に時代精神をきわめて的確に反映しているヴァイマル時代の作品であった³⁵⁾。1920年代の青年層の内面を告知している『デミアーン』は「時代の急所を不気味なくらい的確に突っており，その「電撃的影響」は忘れようにも忘れられない，と『魔の山』の作者マンは回想している (Vgl. GKFA 19.1, 238; GW X-519)。時代は人間の自己変革を要請していた。ヘッセはここで悪魔と神が共棲する人間の魂を，ユング (Carl Gustav Jung) の精神分析に従い「アブラク

29) Werfel: a. a. O., S. 62. 訳文は成瀬無極による。

30) Werfel: Ebd. S. 185. 訳文同上。

31) Ebd. S. 266. 訳文同上。

32) Gay: a. a. O., S. 2. 訳文前掲書3頁。

33) Paul Egon Hübinger: *Thomas Mann, die Universität Bonn und die Zeitgeschichte*. München 1974, S. 50.

34) Laquer: a. a. O., S. 278.

35) Vgl. ebd., S. 320.

サス」(Abraxas)という神話的原型の範疇で把握し、それを人間の自己発見と人格形成の基点とした。ヘッセは『デミアーン』において、戦争によって初めて生まれてくるに違いない、明日の創造の可能性を夢見た。第一次世界大戦は、西洋の没落と価値の転換を伴う新しい文化の誕生の母胎とならねばならない。その思考は当時のマンの焦眉の問題意識と共振していたため、『デミアーン』を公園で読了したマンは1919年5月31日の日記にこう記している：

『デミアーン』も『魔の山』と同じように戦争突入で終わっており、それ以外にもこの上なく注目に値する類似点を示している。いろいろ批判したいところもあるが、私は深い感銘を受けた。

この「いろいろ批判したいところもあるが」の本意は、前日の1919年5月30日の日記に記された次の『デミアーン』批判から明らかとなる：

物語は生そのものということではあるが、完全に精神によって構成された作りものになっている。スタイル上の矛盾はここにある。失敗である。構成はそれ以上のもの、すなわちもっと芸術的なものでなくてはならない。

マンは公の場とは違い、内心ではヘッセを評価していなかった。つまり、非政治的作家マンは巧妙に立ち回り、自分の競争相手ではないと判断したが故に、ヘッセを持ち上げたのである。しかし、マンのヘッセ批判は決して主観的なものではなく、他の文学者も共通していた。『魔の山』を賞賛していたドイツのロマンスト、エルンスト・ローベルトクルツイウス(Ernst Robert Curtius)やリルケもヘッセの文明批評に共感していたが、その作品の芸術性を疑問視している³⁶⁾。第二次世界大戦後のドイツ本国においても、ヘッセの作品はアカデミズムの立場からは純文学として取り上げられず、ヘッセは感傷的な通俗作家と看做されその評価は低い。しかし、我が国の場合と同じように、その通俗性故に読者層は広く、『デミアーン』で活写されているアウトサイダーによる体制批判のラディカリズムは、アメリカのヒッピーや反乱する若者たちに福音となり、1980年代の青年に対する感化力は大きかった。それに対しマンはヘッセのように「電撃的な影響」を青年読者層に与えたことは、生涯一度もなかった。またヘッセは、マンがあれほど酷評していた表現主義から自己に対する深い呼びかけの声を聞きだしている³⁷⁾。ヘッセ文学とマン文学との間の根本的相違はここにもある。

36) Vgl. Ernst Robert Curtius: *Hermann Hesse*. In: *Kritische Essays zur europäischen Literatur*. Bern 1950., S. 214. Vgl. Spiegel, Nr. 32/6. 8. 2012, S. 128.

37) Vgl. Hermann Hesse: SW 14, S. 349.

4

ヴァイマル時代以降マンは、伝統的ドイツ文化の崩壊という「神々の黄昏」を未来救済の契機としなければならなかった。ここにもマン文学のキーワードが確認される。そのプロセスは、ヘッセの場合のように単純ではなく、紆余曲折しており複雑である。マンはファン・デン・ブルック一派に距離をおいていたのであるが、革命と復古の両極を一体化させているこの保守革命のイデオロギーの中に、マンは非合理主義と蒙昧主義を識別するようになった。それは『考察』で擁護してきた非政治的ドイツ精神の伝統も、仲介による両極の宥和と和解の道も遮断し、文化の野蛮性を具有する、凶悪きわまる新時代のイデオロギーであると、マンは洞察した。それ故、ドイツの国際的地位の向上と連合国との協調を推し進めていたユダヤ人政治家ヴァルター・ラーテナウ (Walther Rathenau) の暗殺は、『考察』当時は反ドイツ的として嫌悪していた人物ではあったが、マンに衝撃を与えた。

マンはハインリヒ等他の進歩派の作家たちに比べるときわめて遅れて、ドイツの政治と文化の状況が根本的に変わったことを知り、いわゆる「転向」をしなければならなかった。マンが『考察』で否認してきた西欧デモクラシーは、ドイツ文化の敵ではなくなり、それを非政治的なドイツの土壤に移植していく努力こそが、ドイツの活路となってきたからである。双方の橋渡しがヒューマンズの本質的な営みであることをマンは確信し³⁸⁾、それ故ハインリヒとも和解しなければならなかったが、ここにはマンならではの計算があったことも否めない。

『考察』で擁護してきたドイツ市民文化の伝統がハインリヒを中心とする政治的ラディカリスト達によって否認されたマンは、貴族主義的なドイツ市民文化の伝統を正し、西欧デモクラシーの理念に整合させるための芸術的方法を模索した。その結果、『考察』の鍵概念である「イロニー」、すなわち「中庸のバトス」を現在の状況に適合させることによって、マン独自の「ドイツ共和国」の理念を打ち出し、敵対関係にあったフランスとの協調を真剣に考え、そのため筆や講演によってその実現に尽力した。それ故、以前支持していたヒンデンプルクが保守派に担がれて大統領に立候補することには賛同しなかった³⁹⁾。このマンの転向の具体的経緯については、マンが1922年以降ナチスが政権を獲得するに至るまでの日記を焼却してしまったために、委細を知ることはできない。こういう転向は、ニーチェの言う「ヴァーグナーの場合」(Der Fall Wagner) にならって「トーマス・マンの場合」(Der Fall Thomas Mann) とも言えよう。文化と政治の宥和を縷説しているマンの転向は「きわめて貴重な、この時代にはまことに珍しい洞察」⁴⁰⁾であったが、同時にまた、この混沌の時代を生き抜くための「処世術」でもあり、利害関係に聡いこの作家固有の打算もここでは見逃せない。この非政治的作家は多方面できわめて巧みに立ち回ったために、それに付随するスキャンダルは多く、毀誉褒貶がその都度大きかった。

38) Vgl. Görtemaker: a. a. O., S. 54.

39) Vgl. Hansen: S. 183f.

40) Vgl. Laquer: a. a. O., S. 156.

『考察』の共著者とも言えるベルトラムもマンに対して疑念を懐きはじめ、また、のちにナチスの首魁となるゲッベルスも『考察』を支持していたが、マンの転向に怒りをあらわにした。『ミュンヒェン最新報知』(Münchener Neueste Nachrichten)は、新しく打ち出されたマンのこの共和国主義を「非ドイツ的、反ドイツ的」と非難した⁴¹⁾。ヒューブナー(Friedrich Markus Hübner)も、政治の場で意見を変えることはあり得るが、これほどの変節はひどい、と言明し⁴²⁾、のちにナチスに走ったハンス・ヨースト(Hans Johst)は「詩人の永遠の使命のこの上なく痛ましい裏切行為」と誹謗した⁴³⁾。マンと保守派との間には埋めがたい溝ができ、マンは右派に多くの敵を作り、『考察』以来のマンの本心は理解されなかった。それ故マンは「詩人」(Dichter)ではなく、「作家」(Schriftsteller)と一段低く見られたせいも、マン文学の根本にかかわるこの問題が当時の政治問題に波及するようになった⁴⁴⁾。対立する双方の中間で良心的に自己なりの営みを続けると、両極から攻撃され、一般の信用を失い、孤立無援になり、巧智な政治性は出口のない苦境と鉢合わせになる。時の経過と共に変わる、政治の時代という荒海の只中で羅針盤となったのが、市民時代の代表者であり人類の教育者であるゲーテの、ドイツ的であると同時にヨーロッパ的な、それ故普遍的なヒューマニズムであった。その模倣と制作のため、マンは『考察』のために中断していた『魔の山』の執筆を1919年4月20日に再開する。時局に翻弄され混乱状態にあっても、否、そうであるからこそ、創作により時局と対決するという不動の「非政治的」姿勢は、その後のマンの人生と文学の発展と大成にとって胎盤となり、1924年彼は、懸案であった『魔の山』を「ヴァイマル共和国の小説」⁴⁵⁾として世に問うた。その概要は次の通りである。

平地の日常世界をあとにした「ノーマルで善良な」青年であるハンス・カストルプ(Hans Castorp)は、スイスの高地サナトリウムに入院滞在することにより、ヴァイマル時代と「善意と愛」(GKFA 3.1, 748; GW III-686)という人生の究極の真実を知ることになる。ある時スキーに出かけたハンスは、大雪のなかで倒れ、夢を見る。それは、海辺で楽しく戯れる太陽の子達の背後では悪鬼たちの饗宴が行われているという、古代ギリシアの情景であった。主人公は知った。正負両極からなる生の全体性に通じ、歴史と人間について考察せねばならない。「心情」と「頭脳」の双方がバランスを維持することにより、相互生産的な営みを持続するよう努力せねばならない。人間が「善意と愛」をもってこの世の生に奉仕することの尊さを知るのはその時である。その時人間は「自己の内部でとぐるを巻かず、他者との共同の場で自己を自覚していく」⁴⁶⁾ようになる。ヒューマニズムは

41) Vgl. Hansen: a. a. O., S. 191.

42) Vgl. ebd., S. 186.

43) Vgl. Münchener-Augsburger Abendzeitung. 28.11.1922. In: Kurt Sontheimer: *Thomas Mann und die Deutschen*. München 1961, S. 57. S. 188.

44) Vgl. Hansen., S. 172.

45) Vgl. Hans Mayer: *Ansichten von Deutschland*. Bibliothek Suhrkamp 984. Frankfurt/M. 1988, S. 89-113.

46) 辻邦生『トーマス・マン』岩波書店 1983年 224頁。

高地サナトリウムの魔力 (Zauber) によってはじめて錬成され、「愛」は第一次世界大戦という死と狂乱の巷でいつ生まれてくるであろうか、という語り手の問いかけで物語は結ばれる。シュニッツラー (Arthur Schnitzler) がこの作品を「ユーモリストが無限界を遊歩している」⁴⁷⁾と評しているように、この長篇に特有の「諧謔」、すなわち「ユーモア」がある。マンは真の人間形成は逆理的な「遊び」の精神により可能であると考え、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(Wilhelm Meisters Lehrjahre) を範とする『魔の山』は「深甚にして厳粛な遊び」(GW X-399) となっていた。

「人間教育」という時間を超えた普遍的次元で時局問題を考えるマンは、思想的には転向したが、真の人間の誕生のためには、未来を担っている若者を人生の試練として地獄と劫火のなかを潜り抜けさせねばならず、これが人間教育の魔術であると考えた。この思想は第一次大戦の勃発によって明確化され、ヴァイマル時代にも本質的には継承されているドイツ正統派知識人共通の認識に基づく問題提起と言える。マンは転向という非連続的行為によって時代と人間の問題をより連続的に考えるようになったと言えるであろう。『魔の山』は、ケラー (Gottfried Keller) の『緑のハインリヒ』(Der grüne Heinrich) と共に、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』をもって嚆矢とするドイツの三大教養小説と言われているが、この長篇はゲーテの教養小説のパロディーである。パロディーとは、マン自身の言葉によれば、「その可能性を信じてはいない芸術精神に対する執愛」(GKFA 15.1, 353; GW XI-589) の表白であり、ゲーテ以来の非政治的な市民文化の伝統を喚起しながらも、同時にその潜在的可能性の無さを批判するという、創作のディレンマを示す概念である。従って『魔の山』にはゲーテの教養小説に見られるような、人間の段階的成長と成熟に対する信頼も、粉飾のない自然な呼吸も、香り高いポエジーの折々の輝きもない。マンの批評眼はあまりにも鋭く、反共和国派が、『ブッデンプロック家の人々』によりマンが1929年ノベル〔ノーベル〕(Nobel) 文学賞を受賞したことを証拠に、『魔の山』はあまりにも「知性的」であり「ドイツ的でない」と⁴⁸⁾、手放しの評価を保留したのも察するに難くない。しかしこの時、転向当時のような激しい反応が起こることはなかった。一方リベラリストは『魔の山』を評価し⁴⁹⁾、クルツイウスもマンの転向と本作を支持した⁵⁰⁾。独仏協調関係の確立に貢献し⁵¹⁾、時代というバスに乗り遅れなかったところに、マンの作家として、政治的人間としての力量が確認される。最後のところで時代のムードに惑わされて政治に足をとられることなく、『魔の山』の執筆を再開したことは、マンのその後の人生と文学にとって「関が原での勝利」であった。

47) Klaus Schröter: *Thomas Mann im Urteil seiner Zeit. Dokumente 1891-1955*. Hamburg 1969, S. 125.

48) Vgl. Hansen: a. a. O., S. 167f.

49) Vgl. ebd., S. 163.

50) Vgl. ebd., S. 117.

51) Vgl. ebd., S. 123.

5

マンが1933年、ナチス政権獲得の年、ミュンヘンで行った講演『リヒャルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大』(*Leiden und Größe Richard Wagners*)は、全体が『魔の山』のレジュメであり、同時にまたマンの自画像となっている。マンは技法面ではヴァーグナーの多層的・多義的に構築された叙事詩の精神を継承したが、ヴァーグナーに対する想いは、傾倒とデマゴギー批判という、正負共存的なものであった。このアンビヴァレンツに対するパトスは、師匠ニーチェのヴァーグナーに対する抜き差しならない関係から学んだものであった。マンは、ヴァーグナーの非政治的・ロマン主義的・国粹主義的側面が及ぼす精神的伝染病を憂慮否認することによって、ヴァーグナーの芸術と人生の脱ドイツ的・ヨーロッパ的な特性を確認し、ヴァーグナーを「社会主義者、文化のユートピア主義者」(GW IX-418)とした。このヴァーグナー講演に対し、「深遠なるドイツの心情の音楽的・劇的表現者」であるリヒャルト・ヴァーグナーの尊厳を傷つけ貶めたとの理由で、当時ミュンヘン在住の40人以上の非政治的・国粹主義的な文化人の署名の下に抗議声明が公表され⁵²⁾、当時国外に滞在中であったマンは身の危険を避けるべく、1933年スイスに移住し、さらには1938年アメリカへと亡命した。

マンとハインリヒは亡命地アメリカで反ナチス闘争のため連携した。『マン兄弟往復書簡』には、『非政治的人間の考察』当時の「ハインリヒの芸術に対する根底的批判」は見られない。振り返れば、『考察』での審美主義批判の祖型となっている『トーニオ・クレール』(1903年)は、ハインリヒの『ピッポ・スパノ』(*Pippo Spano*, 1905年)の対蹠物となる芸術家小説であった。マンの初期作品群は兄弟間の確執の所産とも言えるが、『マン兄弟往復書簡』の編集者ハンス・ヴィスリング(Hans Wysling)の注記によれば、マンは1930年という和解後の年にも「ハインリヒの芸術に対する根底的批判」を漏らしている。マンがここでとりわけ疑問視していたのは、ハインリヒの小説における思想とその内容の齟齬であった。マンはここでおよそ次のような観察を行っている：兄は人前では戦闘的なヒューマニストとして自由の理想を掲げ、痛烈きわまる現状批判を行っているが、その作品は露骨で刺激が強く、読むのが時に苦痛となる「愛と死」という類のアヴァンチュールを主題としている。こういう背馳現象を目にすると、兄は高度のミスティフィケーションを行っていると考えられる。兄の現状批判は実はエロティシズムの発現形態ではなかろうか。それは「性と鉢合わせの精神」, 「男根中心の精神」(Phallischer Geist), 即ち「芸術家ならではの精神」と言わねばなるまい。「危機, 変革, 社会での果敢な行為, 骨髄にまでも浸透する政治化」という兄の文学綱領は実質的には「居酒屋での気炎」のようなものであって、兄はアジテーターまがいの世論操作を行っている, と⁵³⁾。すると「ハインリヒの芸術に対する根底的批判」は、「放埒な審美主義」(GKFA 13.1, 615; GW XII-566)と

52) Vgl. Klaus Schröter: a. a. O., S. 199ff.

53) Vgl. *Thomas Mann-Heinrich Mann Briefwechsel 1900-1947*. Hg. v. Hans Wysling. Erweiterte Neuausgabe. Frankfurt/M 1984, S. 403-408.

いう『考察』中でのハイน์リヒ批判と符合しており、ここで素顔を見せる『考察』の著者マンの執拗さは言葉に尽くせない。

マンはハイน์リヒの場合とは異なり、思想上の変節を折に触れ指弾されねばならなかった。「マンの場合」真相は、1922年に刊行された同年の転向表明講演『ドイツ共和国について』(*Von deutscher Republik*)の序文にある次の弁明に帰着する：「私はおそらく思想を変えた—心根は変えていない (GKFA 15.1, 583; GW XI-809), 思想相互の矛盾が見られるにしても、私が『考察』で披露している「ドイツ的人間性の真情」(GKFA 15.1, 584; GW XI-810) はそのまま生きている。」事実『日記』の開封を機に、マンは本質においては『考察』の著者であることが明らかになった。さらにマンは、1937年というナチス批判をしていた時期にも、クーン・フィードラー (Kuno Fiedler) 宛の手紙のなかでこう告白している：「……自分は結局『考察』の著者でした。以前にそうであっただけではありません。今もそうです。」⁵⁴⁾

マンは亡命地アメリカでデモクラシーの勝利の名の下に反ナチ講演や対独放送をしばしば行ったため、終戦直後はアンガジュマンの作家と看做されていた。当時のマンの政治参加は、命を救ってくれたアメリカ政府に対する恩義と義務感に起因するものであった。そこには、このドイツの文豪を対独戦争に利用しようとする、アメリカ政府の政策があったことは言うまでもない。しかしマンは本質的に非政治的作家であり、「殉教を拒否する意向」(Tb. 14.3.1934) に変わりはなかった。1941年11月26日の『日記』の中で、彼はこう本音を吐いている。「家にいるのは良いことだ。政治上の些事が仕事の邪魔をする。」

マンが作家として最終的使命としたのは、『考察』の場合と同じように、音楽を範例とする非政治的な文化の国ドイツを主題とする「最後の書」『ファウストゥス博士 一友人によって物語られたドイツの作曲家アドリアーン・レーヴァーキューンの生涯』(*Doktor Faustus. Das Leben des deutschen Tonsetzers Adrian Leverkühn, erzählt von einem Freund*. 1947年)の完成であった。本作におけるナチズム解読に従うなら、第二次大戦は、第一次大戦当時の黙示録的熱狂の亜種的・悪魔的な再来・再生にほかならない。先に指摘したように、ナチズムをマンは自己自身の深層に潜伏している病巣と解していた。ドイツと自己自身を救済するためにマンは、ゲーテの超ドイツ的・超時代的ヒューマニズムがこの黙示録的深淵において「希望の無さの彼岸にある希望、……、絶望の超越」(GKFA 10.1, 771; GW VI-651) というかたちで喚起されてくるよう、語り手であるヒューマニストに仮託して祈り続けた。この長篇は、悪魔に魂を売って地獄に落ちたファウスト博士を主人公とする民衆本『ファウスト博士』(*Historia von D. Johann Fausten*. 1580年頃)とニーチェの悲劇的生涯のパロディーになっており、ヴァーグナーの楽劇の場合のように、種々様々な主題やモチーフの組み合わせによって人工的に構築されているため、もはや小説

54) *Dichter über ihre Dichtungen. Thomas Mann* 2. Hg. v. Hans Wysling unter der Mitwirkung von Marianne Fischer. München 1979, S. 553.

ではないとも言える。それは、マンがパロディーの作家として担わねばならなかった宿命の十字架にほかならない。マンの作品中最もデモーニッシュなこの長篇の執筆はパロディー作家マンにとっては「不可能の際での、瞬時の休息を知らない、はらはらするほど危険な芸術の遊び」(GKFA 15.1, 318; GW VI-290)であった。それ故マンは『ファウストゥス博士の成立』(*Die Entstehung des Doktor Faustus. Roman eines Romans.* 1949年)のなかでこう述懐している：

私の全作品のなかで残るようさだめられているのは、この処女長篇だけではないだろうか、と思案している。私の「天与の使命」はこれで成就されたに違いない。(GKFA 19.1, 458; GW XI-190)

処女長篇『ブッデンプロック家の人々』において、各登場人物はその場に生きているがごとく活写されており、人生そのものを感じさせずにはおかない。この長篇は分かりやすいが、通俗性に陥らず、全体は格調高い芸術作品となっている。事実、マンは以後このような19世紀風の本当に小説らしい小説は書かなかった。否、書こうにも書けなかった。先述したところであるが、反共和国派が『ブッデンプロック家の人々』によってマンがノベル文学賞を受賞した事実に基づき、『魔の山』を「知的すぎる」と批判したのも故なきことではない。

結 語

第二次世界大戦でのドイツの敗北は以後のドイツ文学の在り方を根本的に変えた。戦後作家は「皆伐」(Kahlschlag)を行い、文化の「ゼロ地点」(Nullpunkt)から出発しなければならなかった。従って、トーマン・マンの永遠の師匠であるゲーテは、新世代の作家たちにとって導きの星にはならず、表現面、手法面で新しい領域を開拓したリルケ、ベン(Gottfried Benn)、ムージル、カフカ(Franz Kafka)、デーブリーン、ベル(Heinrich Böll)、グラス(Günter Grass)等が戦後ドイツ文壇の主流となった。ドイツ最高の文学賞であった「ゲーテ賞」は、反逆・憂愁・医学・亡命の「作家」(Schriftsteller)であり、同時にまた言語実験の開拓者に因んだ「ビューヒナー賞」にその座を禅譲することになった。即ち戦後作家にとっては、自然主義と表現主義の作家たちによって復活したゲオルク・ビューヒナー(Georg Büchner)が最も身近な作家であった。1948年版ビューヒナー全集の編集者カージミル・エートシュミット(Kasimir Edschmid)——ヴァイマル時代マンは、この表現主義者の短篇『王子』(*Der Prinz*)の語り方は「ぞっとする」と日記に書いた(Tb. 15. 5. 1919. S. 672)——はその序文のなかでこう述べている：「ドイツは再三再四ビューヒナーを今日の人間に行っている」⁵⁵⁾と。従って、急変した戦後の文学状況において、ゲーテを師と仰ぐマンの評価は概してネガティブであった。たとえば、その受賞者の一人マルティ

55) *Einleitung. Georg Büchners Gesammelte Werke.* Hg. v. Kasimir Edschmid. München 1948, S. 29.

ン・ヴァルザー (Martin Walser) は自己の創作の焦眉の問題に徴して、マンが確認してきたのは彼が所属していた市民階級の反歴史的イデオロギーとし、そのアクチュアリティを否定している⁵⁶⁾。ドイツは今や市民時代ではなく、小市民の時代となっていることを考慮するならば、こういう類のマン批判が頻出することは察するに難くない。

しかし時代の流れは変わる。第二次世界大戦終結を契機としてドイツは、ヴィルヘルム二世統治下の帝国時代や両世界大戦当時のようにヨーロッパ諸国間の勢力の均整を脅かす強国ではなくなった。ドイツはナチスという忌々しい過去を克復し、民主国家として国際社会へ復帰しなければならなかった。戦後ドイツの使命についてマルティーン・ザルム (Martin Salm) はこう語っている：

ドイツが置かれていた状況を理解する必要があります。地続きで国境を接する多くの国が戦争で侵略されました。当初〔国家成立時〕の西ドイツは、戦争当初から自分たちに強い憎しみを抱く近隣国と共存し、国際社会への復帰を果さねばならなかったのです。そのために政治が大きな役割を演じました。1950年代にはアーデナウアー (Konrad Adenauer) 首相が諸国との修復を進め、70年代にはブランド (Willy Brandt, 本名：Karl Herbert Frahm) 首相が東側との関係改善を図りました。歴史に取り組むことによって近隣国の信頼を得ることができ、ひいてはドイツの国際的な地位向上に資するという長期的な展望でありました。

この「長期的な展望」は開かれ、ドイツの自己変革は軌道に乗り、「……ドイツは今、欧州においてその指導力が頼りにされて……」いる、とマルティーン・ザルムは続ける⁵⁷⁾。また、ヘルムート・ヴァーグナー (Helmut Wagner) は2013年に公表した論文の中で次のように力説している：ヨーロッパの力の均衡関係を脅かす「ドイツ」とは、統一国家建国の年である1871年から終戦の年1945年の間に限られ、それは「ドイツの悲劇」の時代であった。今は時代が変わっており、ヨーロッパ諸国間の勢力均衡を破らずに全体の平和共存に貢献することこそ、統一ドイツの真の在り方となっている、と⁵⁸⁾。このことは、2015年のメルケル首相 (Angela Merkel) 訪日時講演からも確証される⁵⁹⁾。かようなインターナショナルな観点に立つなら、両極間の仲介と双方の和解を政治と文学の使命とする、トーマス・マンの「イロニー」、すなわち「中庸のパトス」が今やアクチュアルになってきたことが示唆されてはいないであろうか？ マンがヴァイマル時代との対決を通じて開いてきたの

56) Vgl. Martin Walser: *Ironie als höchstes Mittel oder: Lebensmittel der Höchsten*. In: *Thomas Mann*. Hg. v. Heinz Ludwig Arnold. edition text + kritik. München 1976, S. 5-26.

57) 『朝日新聞』夕刊 2014年5月8日。

58) Vgl. Helmut Wagner: *Die „deutsche Frage“ im europäischen Kontext. Internationale Dilemma und europäische Visionen. Festschrift zum 80. Geburtstag von Helmut Wagner*. Baden-Baden 2013, S. 87-97.

59) 『朝日新聞』2015年3月10日。

は、非政治的ドイツ精神の自己批判と自己超越によるヨーロッパの政治的・精神的平和への道であり、それは「普遍的なヒューマニズム」への道にはかならないことが、今や再確認される時となっているからである。

追記

本論考は『大阪経大論集』〈第64巻第4号 2013年11月〉に掲載された「ヴァイマル時代の小説『デミアーン』と『魔の山』」のマンに関する記述を基軸に、新たに書き著したものである。関連して触れたヘッセについてはこの『論集』を参照されたい。また本論考は下程息『ファウストゥス博士研究—ドイツ市民文化の「神々の黄昏」とトーマス・マン—』（第二版 三修社 2000年）の追補ともなっている。

本論考を草するにあたり Helmut Wagner: *Die „deutsche Frage“ im europäischen Kontext* から基本的な教示を得た。この論文を御紹介戴いた歴史家三宅正樹氏に筆者一同深甚の謝意を表したい。